

実践報告

「基礎演習・演習Ⅰ」

福島 青史

要 旨

「基礎演習・演習Ⅰ」は、修士課程一期目の学生を対象にした演習科目であるため、学生自身の研究課題を探索する「学術的課題」と、学生間・教師間のネットワーキングなど学生生活の基盤を作る「環境的課題」がある。オンライン授業となった今学期は「環境的課題」に多くの課題が指摘されたが、「学術的課題」は達成されたと考える。今後は、オンライン授業の利点を積極的に活かし、演習を創造的に進化させる必要がある。

キーワード

オンライン授業 一期目の学生 学術的課題 環境的課題

1. はじめに

「基礎演習・演習Ⅰ」¹（以下、「演習」）は、修士課程一期目の学生を対象にした演習科目であり、日本語教育研究科の専任教員全員が担当する。同研究科では一期目の学生は特定の研究室に属することなく、同演習を通して研究テーマを検討し、一期目の終わりに研究指導教員を決めるシステムをとっている。このため、「演習」の課題は、学生が各自の研究課題を探索する「学術的課題」の他に、学生間のネットワーキングや教員との対話を促進し、安心して研究ができる物理的・心理的基盤を作る「環境的課題」がある。本稿ではこの2つの課題を軸にオンラインで実施された「演習」の実態と課題について述べる。

2. 通常時のシラバスと授業運営

本節では、シラバスを参照しつつ、通常時の「演習」の概要について述べる。

2.1 講義概要と到達目標

【講義概要】

「演習」では、1期目の学生が自分の研究テーマをより明確にするとともに、日本語教育学の全体像を意識し、そこに自分の研究テーマを位置づけられるようになることを目標とする。そのために、研究指導教員ごとの演習ではなく、全学生が全教員と相互交流できる機会をもつ。必要に応じて、全体講義、文献講読、個人面談などを行う。なお、本演習の終了時期に研究指導教員希望届を提出し、2期目以降の研究指導教員を決定する。

【到達目標】

「演習」は、次の3点を目標とする。

- (1) 自分の問題意識に基づき、研究テーマをより明確にする。
- (2) 日本語教育学の全体像を意識し、そこに自分の研究テーマを位置づける。
- (3) 「演習」での協議を通して、2期目以降の自らの研究計画を決める。

上記のように「演習」では、到達目標により「学術的課題」が明示的に示され、「環境的課題」は、学術的課題を達成する過程で整えていくという二重の構造になっている。受講者は、学期はじめに「研究計画書①」を提出し、その計画を演習を通して熟考・推敲し、学期の終わりに「研究計画書②」を提出する形で評価される。

2.2 活動内容

「演習」は、①ガイダンス、②全体演習、③修論計画検討、④個人面談、⑤研究室ゼミの5つの活動で構成される。この内、①ガイダンス、②全体演習は全員参加の活動、③修論計画検討は1～2名の教師と3～5名の学生グループによる活動である。④個人面談は学生と教員と一対一の面談であり、⑤研究室ゼミは、各教員が研究室活動のデモを行い、学生が希望する授業を体験する活動である。以下は新入生33名（7グループ）の際のスケジュールの例である。

回	活動	活動内容
1	ガイダンス	演習の進め方についてのガイダンス
2	全体演習①	修士課程や研究についてのガイダンス
3	修論計画検討①	教員1～2人、学生4～5名のグループで、それぞれの研究計画を検討する。学生はすべての教員からコメントを得ることができる。
4	修論計画検討②	
5	修論計画検討③	
6	修論計画検討④	
7	個人面談①	演習の折返し時期に行う個人面談
8	全体演習②	研究倫理について講義・ワークショップ
9	修論計画検討⑤	教員1～2人、学生4～5名のグループで、それぞれの研究計画を検討する。学生はすべての教員からコメントを得ることができる。
10	修論計画検討⑥	
11	修論計画検討⑦	
12	研究室ゼミ①	各教員が、それぞれ活動を準備し、学生は希望する活動に参加する。これにより研究室活動が体験できる。
13	研究室ゼミ②	
14	個人面談②	演習終了時期に行う個人面談
15	研究室ゼミ③	次学期に指導教員となる教員の研究室に参加

「演習」では、全体活動、グループ活動、個人活動といった様々な形態の活動を通して

自らの研究テーマを深め（学術的課題）、学生間、教師間とのネットワークが築ける（環境的課題）ようデザインされている。

3. 授業開始前に行った準備や想定していたこと

2020年度春学期の「演習」は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、授業数が通常の15回から12回となり、形態もオンラインで実施されることとなった。以下、授業開始までに行った準備や想定したことについて述べる。

3.1 シラバスの変更

授業回数と授業形態の変更があったものの、授業概要、到達目標の変更はしなかった。一方で、授業回数が12回になったことから、活動内容の回数の調整を余儀なくされた。最優先したのは、「修論計画検討」である。教師・学生の小グループによる議論は学術的・環境的課題から最重要と考えた。次に考慮したのは「全体演習」である。授業数の減少により、オンデマンドなどで対応が可能であったが、通常でもストレスがかかる新入生の環境を考慮し、通常通りの回数（3回）を確保した。うち一回はオンライン化により必須となる文書検索を取り入れた。「個人面談」も、教師との関係を形成するために重要な機会であるため、通常通り2回実施した。一方、「研究室ゼミ」は、通常3回行われるところ1回となった。

3.2 授業開始まで

5月14日の演習初日まで、想定された課題は、「オンライン授業の環境に適応」、「学生間のネットワーク」、「不安など心理面への対応」であった。これらの課題に対応するため、5月の授業開始前に以下の3つの対応を行った。

4月16日から「オンライン授業開始前セッション」を行った。受講者にとっては、オンライン授業だけでなく、早稲田大学が採用したLMS（Learning Management System）であるMoodleの利用も初めてであり、同セッションはMoodleやCollaborate（Web会議システム）を实际利用する活動であった。Moodle上にフォーラムを作成し、自己紹介や情報交換を行うとともに、4月23日および4月30日の二日間は、実際にCollaborateを利用して、オンライン授業の体験を行った。同セッションにおいて、オンライン上ではあるが、学生同士が顔を見て話をする機会が持てた。また、「アクセスできない」「音が出ない」「通信が安定しない」など、課題が浮き彫りになり、参加者各自がオンライン環境を整えた。

オンライン環境では、複数の連絡手段を準備しておくことが有効だと考え、4月21日、LINE等を利用した学生の連絡網作成を提案した。連絡網作成にあたっては在学生の連絡係に協力を得、学年を超えたネットワーキングにもつなげた。

5月2日、オンライン授業受講環境アンケートを行い、学生の受講環境の確認を行った。結果、すべての学生から「問題はあるが、概ねオンライン授業は可能」という回答を得た。

4. 授業開始後に起こったこと

上記の通り、授業開始前にトライアルセッションを行いオンライン授業への対策をとった。しかし、一学期間のオンライン授業を通して様々な課題が浮かび上がった。本節では授業後のアンケートを元に、それらの課題についてまとめる。

4.1 アンケート概要

アンケートは、受講者および担当教員を対象に、オンライン授業中に起こった問題、その対処法などをオンラインでのフォームにより聴取した（記述式）。調査期間は7月31日から8月6日。調査対象者は受講生26名、担当教員8名（筆者除く）で、この内、受講生17名、教員3名から回答を得た。質問項目の概要は、①オンライン授業の問題点（a. 今学期での対応、b. 次学期に向けての対策）、②オンライン授業の利点である。

4.2 アンケート結果

4.2.1 オンライン授業の問題点

表1は、オンライン授業の問題点を簡略的にまとめたものである。問題点は大きく分けて、インターネット接続など物理的環境に関わるハード面と、人間関係、話の内容、コミュニケーション方法など活動の内容に関わるソフト面に分けられた。カッコ内の数字は回答数を表し、数字のないものは一人の意見である。

表1 オンライン授業の問題点

	カテゴリー	事例	今学期での対応	次学期に向けての対策
ハード	接続	接続できない・落ちる・不安定 (11) 聞こえにくい (3)	ビデオのオン・オフ (2) ブラウザの変更 ソフトの変更 (4) 未解決 (3)	ネット環境を整える (2) 講義の録音の検討 (2)
	情報	研究計画など更新資料の最新版にアクセスできない	未解決	Moodle の効果的な使用
ソフト	関係、話の質	話の内容が深化しない (3) 人間関係が深化しない 現実感がない	LINEを利用して関係を作った (2)	雑談の時間を作る
	コミュニケーション方法	カメラが気になる 画像・音声ミュートの中で発表するのに戸惑った ターンが困難 (4) 複数人で話ができない (2)	画像・音声のルールを決める 未解決 (3)	ルールの周知 話しやすい雰囲気作り (2) 細やかなフィードバック

回答が一番多かった問題は、接続などのハード面である。これらの問題については、想定はされていたが、その時々インターネット環境の問題もあり、完全には対応できなかった。インターネットの負荷の量を調整したり、ブラウザやソフトを変更することで

今学期中に対応できたものもあるが、来学期以降も懸案事項として残る。また、演習が進むたびに研究計画書の内容が更新されていくが、この過程を学生・教員間で共有できるシステムがなかった。今後は、Moodleの機能を精査し対応したい。

ソフト面では、人間関係や話の内容が深まらない、現実感がないというバーチャルなオンライン授業特有の問題が挙げられた。また、オンライン授業環境でのコミュニケーション方法やマナーに対する戸惑いが指摘された。今学期、LINEなどを用いて対話を増やす努力がされたが、「不自然さ」はぬぐえなかった。この課題も想定されたものであったが、どのように問題が顕現するかはわからなかった。オンライン環境に対応したルールを共同で作るなど、新しい環境における積極的・創造的な対応が必要であろう。

4.2.2 オンライン授業の利点

オンライン授業の利点としては、「安心」「時間」「利便性」といった項目が挙げられた(表2)。回答として一番多かったのは、「時間」の項目で、通学や授業間の移動、時間管理の自律性拡大などが挙げられた。また、オンライン環境に特有の「利便性」の指摘も多かった。今学期のオンライン授業は、感染リスクを抑える「安心」のための配慮であったが、今後は、オンライン化の「利便性」も積極的に取り入れる必要があるだろう。

表2 オンライン授業の利点

カテゴリー	事 例
安 心	感染リスクがない (2)、近くにいる感じがする (2)
時 間	移動時間がない (9)、学習時間の管理が自由 (7)
利便性	画面共有などのツールにより見やすく、発表がしやすい (5)、Moodleに教材・レジュメがあり便利 (2)

5. おわりに

以上、「演習」の実践について述べた。事前に準備ができた問題があった一方、未解決の問題も残された。特にハード面の問題は、今後も不確実なものが多い。しかし、人間関係の質や対話の質を高めるソフト面は、教員・学生の創意工夫によって解決が可能である。「ニューノーマル」「新しい生活様式」を創造する新たなコミュニケーション方法の開発は、日本語教育研究科の課題の一つとなるだろう。

アンケートで指摘された問題の多くが「環境的課題」に関するものであった。一方の「学術的課題」については、大きな問題の指摘はなかった。筆者の印象では通常の学期と比較して遜色なく目標が達成されたと考える。教師アンケートにも「通常と変わらない」「一人一人の研究計画にじっくり取り組めた」というコメントもあった。修論計画検討での議論、Moodle上の振り返り、研究計画書②などを見ても、毎学期と同様、学生が各自のテーマに真摯に向き合い、熟考がなされた過程と結果が見てとれた。むしろ、時間的・空間的制約を超えるオンライン授業に、多くの利点を感じた。2020年度春学期の「演習」の受講生にとって、コロナウィルスを巡る問題は、在学中続くだろう。しかし、環境を嘆くのではなく、新たな環境を作り上げる創意工夫が必要である。そして、その可能性は今

学期の「演習」において示された。今後の発展を期待したい。

注

- 1 本研究科では、2020年度4月にカリキュラムが改編された。同学期は移行期にあり、1つの「演習」に、「演習Ⅰ」と「基礎演習」の履修者が混在したため「基礎演習・演習Ⅰ」と併記した。

(ふくしま せいじ 早稲田大学大学院日本語教育研究科)